

9月16-20日イタリア（ベネチア）にて行われた国際蹄病学会に、富田獣医師とともに参加し、ポスター発表を行ってきました。まずは感謝を申し上げます。ありがとうございました。私の発表は、趾皮膚炎（DD）のひどいものをきれいに治す方法の考案によって20例の治癒症例まとめでした。

アメリカでは群が大きいために、こまめな包帯除去ができないことから包帯の食い込み「包帯病」を後遺することが問題になっており、その結果、2日以内に取れやすく巻く包帯「ビキニラップ」が主流です。その一方で、ヨーロッパでは保湿される包帯の方が治癒が良いとされ、1週間ずつ2~3回交換する方法が提唱されています。日本では、アメリカナイズされた削蹄師さんが多く、短期間で処置する方法が主流のようですが、「コレは！というような重症例」には、良く治る方法を適用することを私は推奨しています。ポスターの前で立ち止まってくれた方から様々な質問をいただきました。貴重な情報交換の機会でした。

本会議も、前後に行われた「プレカンファレンス」「オプションルツアー（農場訪問）」もパーティーも（が）充実していてとても勉強になりました。日本からは削蹄師さんが22名、獣医師が3名（発表者2名）でした。日本からは少し発信力が弱い感じがしたので各大学へプッシュしたいと思いますし、何より日頃の症例、事例に対して取り組んだ結果を積み上げて、治療や予防に発展させていくことへの必要性を再確認しました。



国際学会につきもののガラディナーパーティーはこんな感じ。ドレスコードありで会場も凄くて・・・ボラーレ歌える環境ではありませんでした（スマセン）

次のページは、オプションルツアーについてまとめたのでご覧ください。訪問地はベネチアから1時間ほどの農場です。農場内に5カ所のブースが設けられており、15名ずつのグループがそこで学習する形でした。

【写真を見て問題を見つけよう】



無作為に引いた写真に写った牛や牛舎について各自が意見を述べ合います。左はフィンランドのグループと一緒に、防護服が全く締まらない削蹄師さんが自分の意見を発表している様子です。すごいひげのすごく怖そうな削蹄師さんもいらっしゃいました・・・→



【ANKA 削蹄の安全対策】

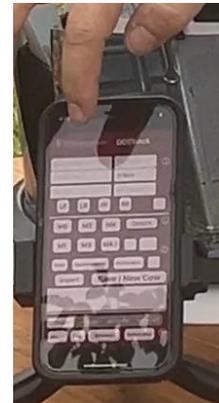
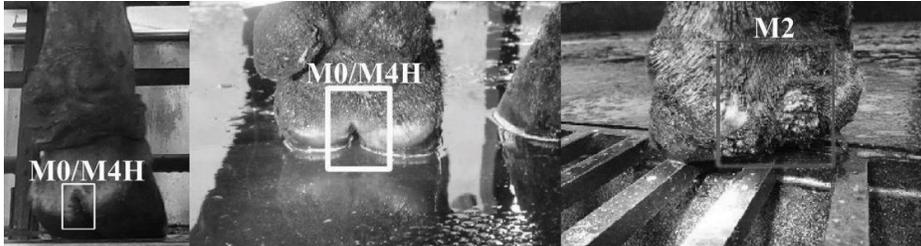
世界のどこかで削蹄師さんが傷んでいます（首肩腰、または外傷）。そこで、ANKA（デンマークの削蹄機器会社）では、防刃（ぼうじん）手袋やヘルメット、または準備運動や体に無理のない適正な姿勢で行う作業を推奨しています。



準備運動は農場やTHMSでも必要かと・・・

【ドルテ・ドーファ DD 発見器】

DD 発見装置（システム）も発展しています。カメラで DD の様子を検知するシステムが実用化に近づいています。アメリカでは急性か慢性かの区別をつけるスマホアプリが実用化しそうです（↓）。



一方イギリスでは、ロボット搾乳機の出口の蹄浴槽にカメラを内蔵させ、洗って出た足先の画像を AI 解析して急性期病変を発見し、翌日全頭、全趾の情報を牛番号と合わせて報告させるシステムが稼働し始めたようです（→）。



その他、ドルテ先生には「趾間の DD」について直接質問

しました。成り立ちとして DD 刺激による過形成なのか、過形成の表面に後から DD がくっついたのか・・・「それはどちらもあり得る（卵と鶏）。」

できた過形成は切除すべきか・・・「まずは軸側蹄壁を薄く滑らかにして、それでも痛がるくらい過形成が大きいならば切除する（私と全く同意見）。」

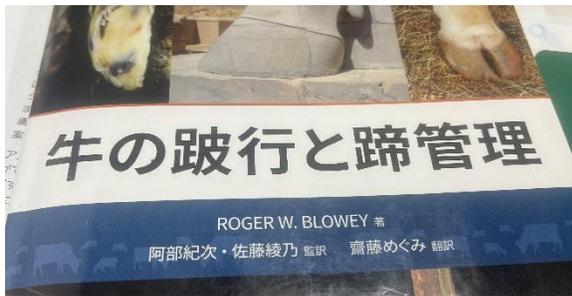
国際蹄病学会その3



これらの写真は、放牧農家で今年散発している蹄病です。

「軸側裂蹄：じくそくれってい」と呼ばれます。「牛の跛行と蹄管理」によると、蹄壁の軸側部分と蹄底の軸側部分の接合がうまくいっていない状況で亀裂が生じる。放牧形態で多く、近年増加傾向があり、DDとの関連も疑われている

とのことです。しかし、ニュージーランドではDDとは関係なく発症しているとの記述があるため、今回の国際蹄病学会で、この本の著者であるロジャー・ブロウイ先生と、ニュージーランドの獣医さんと意見を聞きたいと思っていました。



ロジャー先生は、5年前に私が本の監訳を申し出た際のことを憶えてくれていてとても丁寧に教えてくださいました。

「原因的に決めてはない。ビオチンを飼料添加して蹄の組成を硬くするのが良いのはいか（日本では全葉のフットビオ）。」

とのことでした。一方でニュージーランドの獣医師も丁寧に教えてくれました。「確かに多い。蹄病の多くがこの病気である。湿潤状態と乾燥状態が繰り返すとこのような状態が生じるのではないかと。削蹄で軸側部分を取りすぎると起こりやすいように思う。

★なるほどと思いました。放牧する前の5-6初旬に削蹄することが多いのですが、舎飼いの蹄は固く締まっており、さらに薄いことが特徴です。その状態で、比較的に柔らかい軸側部分（土踏まず）を多くとると、その後放牧でその部分（接合）が弱くなってしまう恐れは十分にあるでしょう。

繋ぎ飼いから放牧に移行する場合、その辺りを削蹄師さんと調整されると良いですが・・・

ニュージーランドの獣医師がはっきり言っていたことは、「放牧すれば土踏まずは自然にできるものだから、削蹄で作る必要はありません。」

合点がいく答えでした。

★このような形で、本物と出会えるのが国際学会の醍醐味なのです。